—2011年度国際剣道・居合道講習会—

INTERNATIONAL- KENDO- IAIDO SEMINAR

講演

「日本の“心”について」

於 ブリエッセル ADEPS スポーツセンター
明治大学教授
剣道教士8段　　平川 信夫
居合道教士7段
Professor of Meiji University
Kendo Kyoshi 8th Dan
Iaido Kyoshi 7th Dan
NOBUO HIRAKAWA

「心」

"Heart"

ヒンズ -教

A Hindu Teaching

人生を変えたいと思えば

If you are thinking of changing your life,

先ずその心を変えなさい

first you must change your heart.

心を変われば態度が変わる

If your heart changes, your attitude will change.

態度が変われば行動が変わる

If your attitude changes, your conduct will change.

行動が変われば習慣が変わる

If your conduct changes, your habits will change.

習慣が変われば人格が変わる

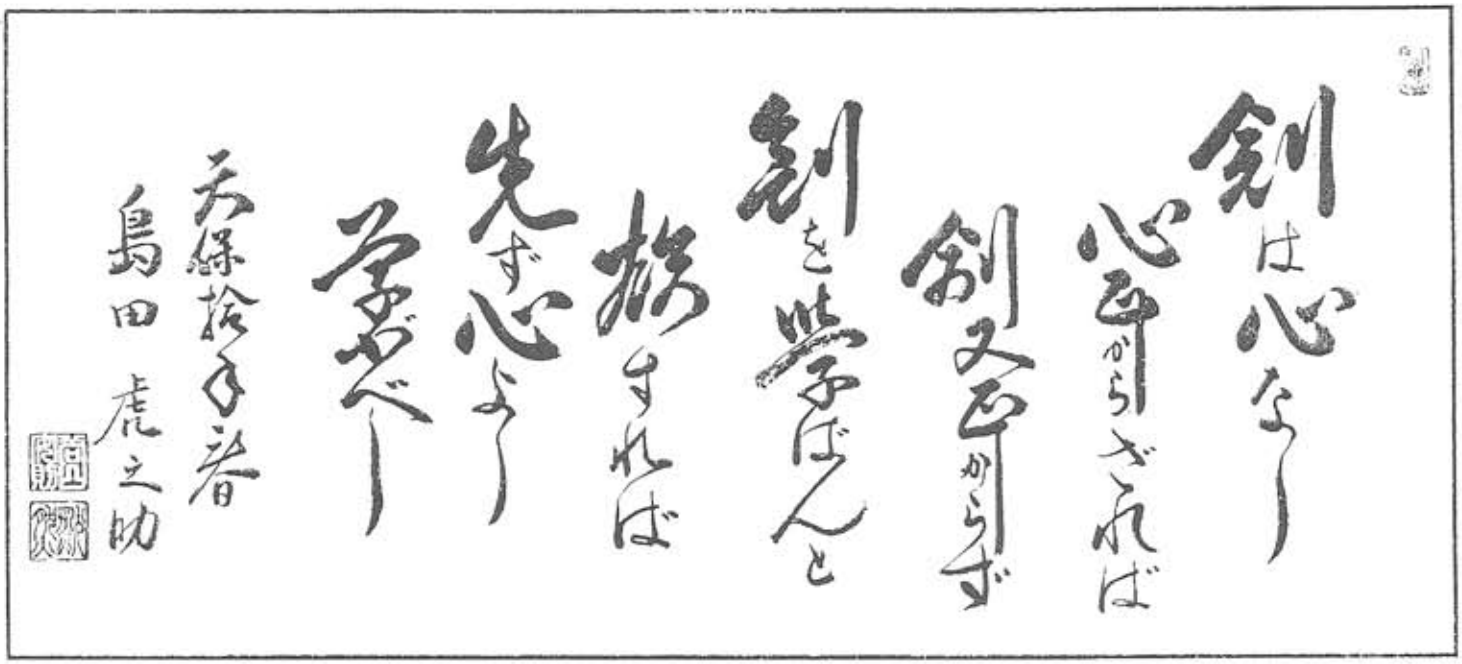
If your habits change, your character will change.

人格が変われば運命が変わる

If your character changes, your fate will change.

運命が変われば人生が変わる

If your fate changes, your life will change.



IGKC 顧問　範士九段　谷口安則先生 揮毫
(By Mr. Yasunori Taniguchi, Hanshi 9dan and advisor to IGKC)

剣は心なり
心正しからざれば
剣又正しからず
剣を学ばんと
欲すれば
先ず心より
学ぶべし
天保十年春
島田虎之助

剣道をしていると、その人の性質や心持が剣道の上によくあらわれる。いそがしい人の剣道はいそがしく、ゆったりした人の剣道はゆったりしている。大胆な人は大胆な剣道をし、慎重な人は慎重な剣道をする。まるで剣道は、その人の心をうつす鏡のようである。

したがって、姿かたちが美しく、正々堂々とした剣道をしようと思えば、まず自分の心を美しく、正しくしなければならない。心がよこしまであって、剣道だけ美しく、正しくしようとしても無理である。

そこで、本当に、立派で正しく、見た目にも美しく、それでいて強い剣道をしようとするには、ただ道場で竹刀を振り回す剣道の練習だけでは足りないということになる。

自分の心を美しい心に、正しい心に、強い心にしようと毎日努力しなければならない。これが修養というものである。

即ち、これは精神的なもの、心の持ち方を剣によって学ぶという考え方。武道は人間形成とか精神修養などといわれるが、例えば幕末の志士たちは剣による修業を非常に重視していた。

人物像

『島田虎之助直親』大分縣の出身。
同弟子同僚に撃剣興行を行った榊原鍵吉友善がいた。
直心影流・男谷精一郎信友の弟子で大分の中津出身。剣客として有名。
禅よりも儒道・人倫を重視し、儒道と剣道の一致を説き、孔孟の教を剣上に生かせばよいと考えていた。
眼窩がくぼみ、鼻梁がたかく、一見凄みのある顔貌であったが、資性剛直、義気に富み、勇猛信念の人物であった。

人物像
『島田虎之助直親』

Shimada Toranosuke Jiki-Shin

直心影流・男谷精一郎信友の弟子で、大分の中津出身。剣客として有名。同弟子に撃剣興行を行った神原鍵吉友善がいた。

Shimada, a famous swordsman, was born in Nakatsu City in Ōita Prefecture. Together with Sagakibara Kenkichi, founder of the *gekiken-kōgyō* (kendo shows), he was a student of Ōtani Seiichiro Nobutomo of the *Jiki-shinkage-ryu*.

禅よりも、儒道・人倫を重視し、儒道と剣道の一致を説き、孔孟の教えを剣上に生かせばよいと考えていた。

More than Zen Buddhism, Shimada placed importance on Confucianism and humanity. He advocated a union between Confucianism and kendo and he thought that the teachings of Confucius and Mencius were good means to make the most of the sword.

眼窩(がんか)がくぼみ、鼻梁たかく、一見(いっけん)凄味(すごみ)のある顔貌であったが、資性剛直(しせいごうちょく)・謙譲(けんじょう)・義気(ぎき)に富み、勇猛(ゆうもう)信念(しんねん)の人物であった。

Shimada was a man who had deep-set eyes, a high nose and at a glance had a strange looking face but he had a nature rich in integrity, humility and heroism. He was also a man who was brave and had faith in his convictions.

「剣は心なり（剣は心です）
心正からざれば（心が正しくなければ）
剣また正しからず（剣も正しくならない）
剣を学ばんと欲すれば(ほっすれば)、先ず(まず)心より学ぶべし
（剣を学ぼうとするならば、まず心から学ぶことだ。）」

The sword is the mind.
If the mind is wrong,
the sword is also wrong.
To study the sword,
you must study the mind.

すなわち、これは精神的なもの心の持ち方を剣によって学ぶという考え方。武道は人間形成とか精神(せいしん)修養(しゅうよう)などと言われるが、たとえば幕末の志士(しし)たちは、剣による修業(しゅうぎょう)を非常に重視(じゅうし)していた。

Namely, this way of thinking is that one's mentality should be studied as if it were a sword. It is said that budō is the practice of molding one's character or cultivating one's mind but, for example, the patriots of the Bakumatsu Period, great importance was placed on training through the medium of the sword.

When doing kendo, a person's nature and spirit is well shown. A person who is hurried has hurried kendo and a person who is calm has calm kendo. A bold person has bold kendo and a cautious person has cautious kendo. It is just as if kendo is a mirror on which someone's heart is shown.

Accordingly, if you want to do kendo with beautiful form and that is just, first you must make your own mind beautiful and just. When your mind is unjust, if you try to have beautiful and just kendo it will be impossible.

So really, to try to do magnificent and correct, nice to look at and beautiful but still strong kendo, it is simply not enough to only swing about shinai in the dojo.

To try to make your own mind beautiful, strong and just, you must make an effort. *That* is called cultivation.

迷うのも心　悟るのも心

1603年、徳川家康は全国を統一することに成功して江戸に幕府を開き、徳川幕府の精神的支柱を、道徳と政治を一つとみる德治主義と定め、その幕政の展開に従い、仏儒の教えを「文」とし、文の裏付けなき武は暴とする文武不岐論が提唱され、その後二百数十年という世界に類例をみない鎖国が、文武を見事に醸成し、日本独自の誇り高き、武道という文化に昇華したのである。

江戸時代も、初期の平和社会建設の時代、平和享楽の時代、動乱の時代という社会背景が、武道の表面的容態を相当に左右しているが、一貫して変わらぬものは「文武不岐論」であった。

その言う「文」は、神仏儒習合によって成立した道徳で、沢庵禅師が不動智神妙録に引用した「心こそ、心迷わす心なれ、心に心、心ゆるすな」という心の部分である。

沢庵禅師は江戸時代初期の人である（1573～1645）。

同時代の人、鈴木正三（1579～1655）も（関ヶ原の役にも出陣したことのある江戸初期の武士で、42歳のときに出家して禅を学び、仏教や禅の教えを日常茶飯の生活の中に活かそうと努力した）その著「万民德用」に、心こそ……の古歌を引用しているので、この古歌は当時よく知られていたものと推測できる。「心」については、沢庵禅師や鈴木正三の江戸初期より現在は、というより二千数百年前の釈迦の時代より、孔子の時代より退化してしまっているのではなかろうか。インド大乗経典「大宝積経」迦葉品に、心について実に多くのことを綴っている。

心は幻の像に似ている。うつろな分析によってさまざまなあり方で現れる。

心は風に似ている。遠く行き、捉えられず、姿を見せない。

心は河の流れに似ている。留まることがなく、生じるとすぐ消える。

心はともしびの炎に似ている。原因と条件がそろうと燃え上がってものを照す。

心は稲妻に似ている。すぐ消えて、ひとときも止まらない。

心は虚空に似ている。知らないうちに汚れてしまっている。

心は猿に似ている。いつもの欲しげでさまざまな業をつくる。

心は画家に似ている。さまざまな業を描き出す。

心は一定の場所に留まることがない。それぞれ違った迷を引き起す。

心は王に似ている。すべての存在を統率している。

心は怨敵に似ている。すべての苦悩を引き起す。

人の心ほど不思議なものはない。古来からその心の本性をめぐって哲学者たちが論議を戦わし、宗教家たちが思索を傾けた。迷うのも心、悟るのも心にほかならない。

鎌倉時代の一遍上人（1239～1289）は次のような歌を残している。

"いにしえは、心のままにしたがいぬ、今は心と我にしたがえ。（解釈）仏を信じなかった昔は、愚かな自分の心の命ずるままに行動した。しかし現在私はすべてを捨てて仏に帰依している。だからわが心よ、今は私にしたがうがよい。

この歌で思い浮かぶのが、「常に心の師となるべし、心を師とせざれ」の言である。

ここで言う「心の師」とは仏のことである。つまり仏を師とすべきであって、己の愚かな心にしたがってはならぬということである。「仏」は「仏陀」を省略したもので「真理に目覚めた人」という意味である。

したがって、仏を師とすべきであるということは、「真理を師とすべし、真理にしたがえ」ということなのだ。

子曰く、「吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従って矩を踰えず」

孔子の有名な言葉である。「五十にして天命を知る」、この言葉は釈迦が真理に目覚めたということと同意語なのである。

人間は生物であり動物であり人間である。人間がその心を真理に向ければ人間性の向上につながり、天を離れ、地を離れた、自己中心的欲望に向ければ、人間が動物に退化する。動物に退化することを望む人間はいない。しかし現に人間の精神性は荒廃し、日本社会は混乱の極という様相を呈している。何故か。

人間は喜びを求める動物であるといわれる。だからある場合には進化向上に反しようが何んだろうが、当面の自分にとって喜ばしいことを実現しようとし結果としては、喜びをもめながら喜べない苦しみと不幸に襲われているのである。

人間が結果的に本当の喜びを得ようとすれば、心を真理に直結することが必要となるのである。

このようにみてくると、「中庸」でいう「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」ということも、道元禅師が説く「人間本来仏なり」ということも、人は神の子、生命は神の分霊と考える惟神も、人間のあるべき姿を説いて共通であることがわかるのである。

現今の精神性廃退に逆比例するのが日本人の体格の大型化である。

食文化が動物の体形を変化させ、精神文化が人間の行動様式を変化させる。その変化はいつのまにか、である。

"人の世にあるや、心の栄養と体の栄養とは一日も欠くべからざるなり。心何をもって養うか、体何をもって養うか。心は道德によって涵養し、体は飲食によって栄養す。一日飲食を欠くときは身体すなわち衰弱す、故に人の飲食を忘るものはこれなきなり。その道德に至りては人心を涵養するや漸漸徐徐をもって入る。故にこれを軽慢にする者多しとす。という教訓がある。この人心を涵養する道德をいつの時代から軽慢にしてきたのだろうか。

「心」を大切にする、という言葉の意味を間違ってはいけない。

心のわがままときくことが心を大切にすることではない。

経典（インド大乗経典「大宝積経」迦葉品第九十八節・九十九節）に

心について実に多くのことを、まるで美しい詩のようにつづっている

心は幻の像に似ている。うつろな分析によって、さまざまな在り方で現われる

心は風に似ている。遠く行き捉えられず姿を見せない。

心は河の流れに似ている。留まることがなく、生じると、すぐ消える。

心は、ともしびの炎に似ている。原因と条件がそろうと燃え上って、ものを照す。

心は稲妻に似ている。すぐ消えて、ひとときも止まらない。

心は虚空に似ている。知らないうちに汚れてしまっている。

心は猿に似ている。いつも、もの欲しげで、さまざまな業をつくる。

心は画家に似ている。さまざまな業を描きだす

心は一定の場所に鎮まることがない。それぞれ違った迷をひき起す

心は、ひとり歩きをする

心は、王に似ている。すべての存在を統べ平している

心は怨敵に似ている。すべての苦悩をひき起す。

人の心ほど不思議なものはない。

釈尊は心について、その本性を善とも、悪ともしない。善い心で話したり、行ったりすれば幸せを生むが、悪い心で話したり、行ったりすれば、争いを生むと教えている。

古来から、その心の本性をめぐって、哲学者たちが論議を戦わし、宗教家たちが思索を傾けた。迷うのも心であるが、悟るのも心にほかならない。

転迷開悟の鍵を握るのが心のようにもみえる。

Treat Your Mind Importantly

The saying, "Treat your mind importantly," must not be misinterpreted. Listening to your mind's selfishness is not what this means. In the Indian Mahayana Buddhist scriptures called *Maharatnakuta*, there are many things that are written about 'mind'.

The 'mind' is like a phantom – there are many ways in which it appears.

The mind is like a wind. It goes quickly, and unable to grasp it, it does not show its form.

The mind is like the flow of a river. It does not stop, and once it comes, it quickly goes away.

The mind is like the light of a fire.

The mind is like a flash of lightning. It quickly disappears, not stopping for even a short time.

The mind is like air. Things within it that you do not know make it dirty.

The mind is like a monkey. It makes work for itself by being inquisitive about many things.

The mind is like an artist. It paints pictures of many things.

The mind does not settle in one place. It gives rise to many different riddles.

The mind is like a king. It commands all existences.

The mind is like a sworn enemy. It gives rise to all suffering.

There is Nothing More Mysterious than a Person's Mind

Buddha does not say if the mind's real nature is good or evil. He teaches that if you talk or act with good mind, it will bring happiness. However, if you talk or act with bad mind, then it will cause trouble.

From ancient times, philosophers have debated on, and men of religion have studied, the real nature of the mind. A mind can get lost, but it can also reach enlightenment. It seems that the mind is the key to freeing yourself from a situation in which you are lost and reaching enlightenment.

In 1994, Kuwata Jiro, who is a researcher of Buddhist texts, wrote "The Soul of Language". The following is what he said in this book.

Spirit

The mind is at the centre of the human spiritual senses. It goes up to the sky, connecting with the soul, and goes down towards the earth, connecting with "body and life".

In the body, there is an awareness of senses which we call life, and the spirit, through these senses, creates a world in which the mind is full of desire and emotion.

The fundamental purpose of life is evolution, and rules of evolution are in every single living creature. Therefore, when these rules are broken, we cannot live in peace. The life in a body has rules of its own, and if you neglect them, you will become ill. The same applies to the spirit.

Life always craves for pleasure, but I cannot help going for pleasure no matter if that is against evolution or not. For example, cantankerous people come to enjoy to trouble people, ill-treat people - things that are supposed to be bad. People whose sprit is heading opposite to evolution cause the same phenomena, and acts that are against evolution become their joy. When the spirit is heading opposite to evolution, people search for happiness but end up suffering because they cannot enjoy it.

A Lost Mind, an Enlightened Mind

In 1603, Tokugawa Ieyasu succeeded in unifying Japan, and started the Tokugawa *bakufu* (military government or *shogunate*). To give spiritual support to the *bakufu*, morals and government were combined as one in law. For the military government's spread to be obeyed, Buddhist and Confucian teachings or *bun* (words) were supported by *bu* (military) and the doctrine of *bunbu-fuchimata* (*bun* and *bu* are not separated) was advocated. Because of Japan's national seclusion, for more than 200 years *bunbu* developed beautifully as a unique characteristic of Japan, eventually becoming the culture of *budō*.

In Edo Period (1603-1868) society there were the early stages of the making of a peaceful society, times when peace was enjoyed, and the times when there were disturbances, but as *budō* was having a considerable influence, the doctrine of *bunbu-fuchimata* was consistently unchanging.

The word '*bun*' from *bunbu-fuchimata* means 'morals'. They were made from a fusion of Shinto, Buddhist and Confucian teachings, which are part of 'mind' from the following song quoted by Zen priest Takuan Soho in *The Unfettered Mind*;

> It is the mind itself,
> That leads the mind astray,
> Of the mind,
> Do not be mindless.

Takuan (1573-1645) lived during the early part of the Edo Period. One of his contemporaries was Suzuki Shōsan (1579-1655), also a samurai in the early part of the Edo Period who took part in the famous battle at Sekigahara. When he was 42, Shōsan became a priest and studied Zen and he made a great effort to try and make Buddhist and Zen teachings a part of daily life, not just for priests. In his work *Banmin Tokuyō* (*Right Action for All*), he also quoted the same old song as Takuan above, so it is possible to presume that it was known by them at the same time. Regarding 'mind', there has unfortunately been a degeneration from Takuan and Shōsan's early Edo Period until now, and also from about 2,100 years before that from the time of Buddha, and Confucius. In the story of Kasypa featured in the Indian Mahayana Buddhist scriptures called *Maharatnakuta*, there are many things that are written about 'mind'.

The 'mind' is like a phantom – there are many ways in which it appears.

The mind is like a wind. It goes quickly, and unable to grasp it, it does not show its form.

The mind is like the flow of a river. It does not stopped, and when it comes, it quickly goes away.

The mind is like the light of a fire.

The mind is like a flash of lightning. It quickly disappears, not stopping for even a short time.

The mind is like air. Things within it that you do not know make it dirty.

The mind is like a monkey. It makes work for itself by being inquisitive about many things.

The mind is like an artist. It paints pictures of many things.

The mind does not settle in one place. It gives rise to many different riddles.

The mind is like a king. It commands all existences.

The mind is like a sworn enemy. It gives rise to all suffering.

There is nothing more mysterious than a person's mind. From ancient times, scholars have argued, and men of religion have tended to mediate on its true character. A mind gets lost, and a mind also reaches enlightenment.

In the Kamakura Period, Ippen Shonin (1239-1289) left behind a song like this.

> In the time when I did not believe in Buddha,
> I did anything that my stupid mind told me.
> But now I have thrown away everything and follow Buddha,
> My mind follows me.

This song brings to mind the saying, "Become the master of your mind, do not let your mind become your master." In this saying, "master of your mind" is a concept from Buddhism. In brief, it is saying that you should make Buddha your master, and not act accordingly to the foolishness of your mind. This means someone who has reached enlightenment. Consequently, saying that you should make Buddha the master of your mind is mastering truth.

A famous saying of Confucius is, "At 15 I set my heart on learning; at 30 I firmly took my stand; at 40 I had no delusions; at 50 I knew the Mandate of Heaven; at 60 my ear was attuned; at 70 I followed my heart's desire without overstepping the boundaries of right." Referring to the line, "At 50 I knew the Mandate of Heaven," it is a synonym for

the Buddha becoming enlightened.

A human is a living thing, which in turn is an animal which is in turn a human. If a human turns their mind towards the truth, connected with the improvement of human nature, but separated from heaven and earth and turned towards selfish passions, humans will degenerate into animals. There are no humans that wish to degenerate into animals. Actually, however, human spirituality is decaying, and Japanese society is showing signs of becoming gravely confused. Why is this?

It is said that humans are animals that look for happiness. So in some cases, even though contrary to evolutionary improvement, as a result of trying to realise pleasant things, you may be caught up in torment and misery while looking for happiness. If humans try to obtain real joy, it is necessary that the mind is connected to the truth.

Added to what has been discussed so far, "Faith is the road to heaven, and making that true is the road of people," was written in a book of Chinese philosophy. Also, the priest Dogen (1200-1253) preached, "Buddha is intrinsically human." Humans are the children of God, and life is a part of god. What these things above all have in common, is that they are teaching how people should act.

Nowadays, mental decay is inversely proportional to the increase in body size of the Japanese people. Dietary culture changes animals' bodies, and mental culture changes the way that humans conduct themselves. These changes occur without our knowledge.

There is a teaching that goes, "Being in the human world, mental and physical nourishment should not be lacking for even a day. With what should you feed your mind and your body? The mind should be nourished with moral education. The body should be nourished with food and drink. If we do not have food and drink for even a day, our bodies will become weaker, so for that reason, we are not neglectful of food and drink. On the other hand, when it comes to moral education, it comes in vaguely and slowly and it is not clear to see if it is enough, so it is easily neglected. There are many people who neglect this."

This moral education that nourishes people's mind, I wonder since what age we have been neglecting it...